

山田寺北面大垣の調査

—第188-8次・11次

1 はじめに

本調査は、特別史跡山田寺跡北辺における法面改修工事ともなう試掘調査（第188-8次）、および発掘調査（第188-11次）である。

第188-8次調査では、東・中・西の3カ所に調査区を設定した（図176）。各調査区の規模は、東区と西区が東西3.0m×南北3.5mで、中区は東西3.0m×南北5.0mで掘削を開始したのち、後述する通り北面大垣柱列の推定線土付近を南北2.0m×東西4.0m（西に3.0m、東に1.0m）拡張した。調査面積はのべ44㎡。調査期間は2016年9月21日から10月25日である。調査は、工法等を検討するため遺構面の深度や地山の残存状態を把握することを目的としたため、各遺構は平面検出にとどめ、掘削や断割調査はおこなっていない。西区については先述の目的に対して十分な成果が得られなかったことから、後日規模を拡張して発掘調査をおこなった（第188-11次調査）。

第188-11次調査は、第188-8次調査の西区を一部取りこむ形で21㎡のL字形の調査区を設定した。調査期間は2017年2月7日から2月16日である。第188-11次調査の成果については整理の途上にあるため次年度の紀要で報告することとし、以下では第188-8次調査の成果について述べる。

2 調査の成果

基本層序は、各調査区とも表土（整備盛土を含む）、耕作土、床土、中世以降の遺物包含層、整地土、地山となる。遺構面は地山もしくは整地土層上面である。現地表面の標高は起伏があるが、概ね117.7～118.0m程度、掘削最大深度は東区が約GL-1.5m、中区が約GL-1.6m、西区が約GL-1.9mである。

調査地は全体に史跡整備ともなう盛土が施されているほか、史跡指定以前は水田として耕作されており、耕作土および床土が厚く堆積していた。その直下は中世以降の遺物包含層であるが、中区と東区では現状の法面下端、敷地境界付近に積石列が存在する。両調査区北端では、積石列の設置ともなう掘り込みおよび裏込土の充

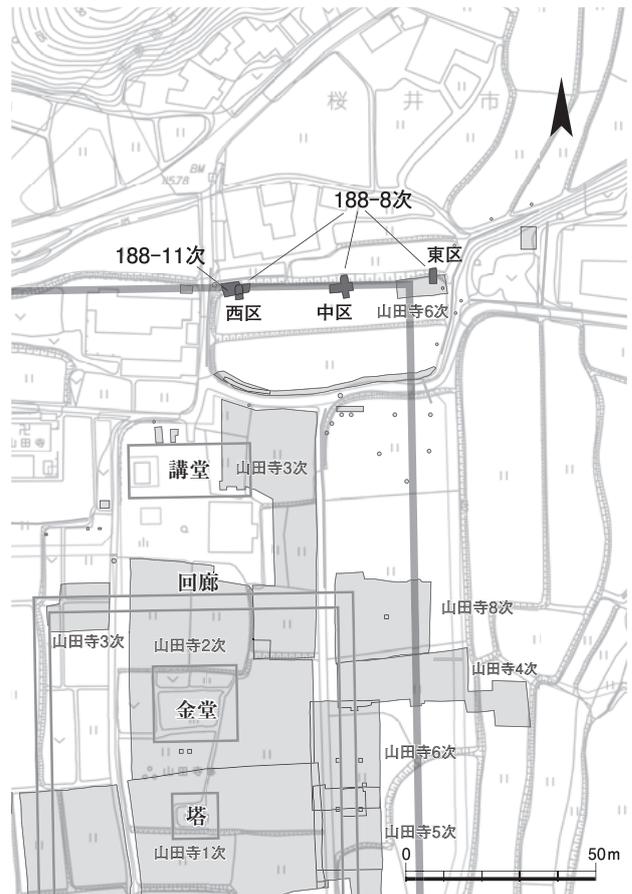


図176 第188-8次・11次調査区位置図 1:2000

填がみられた。積石列は裏込土出土の遺物から少なくとも近世以降に設置されたものであり、かつては法面擁壁として機能していたものであろう。

以下では各調査区の成果について記述する（図177）。

東 区

東区では山田寺第6次調査区東北隅（1984年度）で検出していた南北方向の石積溝（SD540B）の延長部分を検出した。今回検出した範囲では溝埋土を掘削しなかったが、両岸を構成する石列の天端の高さは順に北へ向けて低くなることから底面も北向きに下がるとみられる。東側石列のうち北2石は、他の石に比して大ぶりのものを配置している。これはSD540Bがこれまでの想定通り北面大垣に沿って西に曲がるのであれば（『山田寺発掘調査報告』2002）、流水の影響を受けやすい隅角の外側に大ぶりの石材を配置した可能性が考えられる。

中 区

中区では遺物包含層の下、地山上に整地土が厚さ約0.1m残存する。この整地土の上面が遺構面となり、東

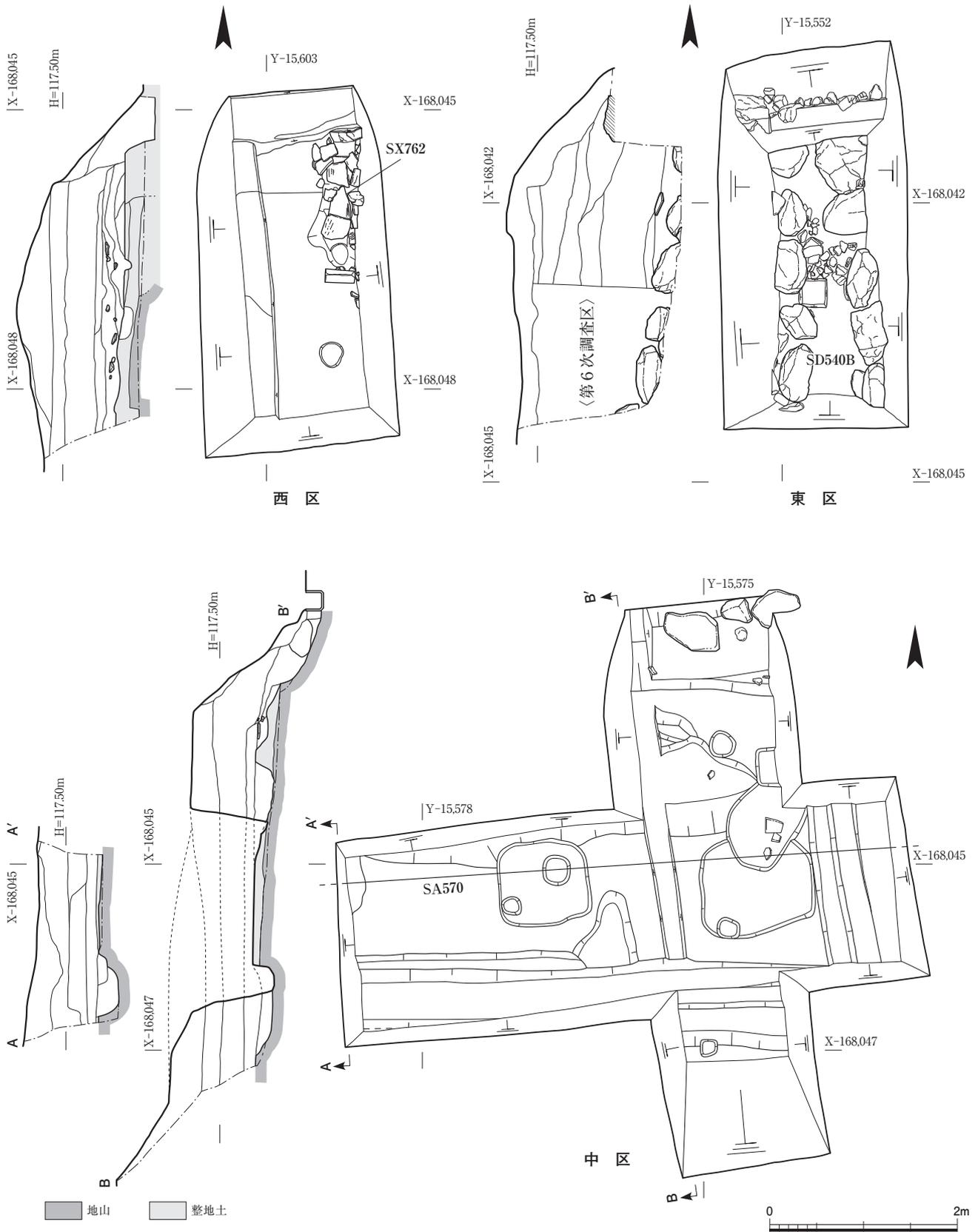


図177 第188-8次調査各区遺構図・西壁土層図 1:60



図178 SA570 (中区、東から)

西に並ぶ柱穴2基を検出した(図178)。このうち東柱穴は掘方が東西1.2×南北1.1mで、柱抜取穴が北東方向に延びる。抜取穴は東西0.8×南北1.0m以上の規模である。西柱穴は掘方が東西1.0×南北0.9mで、掘方内の東北に寄った位置に径約30cmの柱痕跡を確認した。さらに西の柱穴の西側1.4m、調査区西壁際では延長部分の柱穴とみられる遺構の一部を検出している。これらの柱穴は山田寺北面大垣の推定線上に位置することから、北面大垣SA570を構成する柱列の一部と考える。西柱穴の柱痕跡心と東柱穴抜取南側中央付近の距離は230cm程度であり、第6次調査の北面大垣東北隅付近の成果と整合的である。柱穴の規模についても、他の地点と比較して大垣を構成する柱として遜色はない。

以上のように、中区の調査成果からは北面大垣は8尺等間の一本柱塀である可能性が高まった。ただし、東面や南面など大垣の他の地点では柱穴の重複があり、大垣の建て替えがなされたことが指摘されている。今回の調査で平面的に確認した柱穴には重複は認められず、掘削や断ち割り調査をしていないこともあり、建て替えは確認できない。

西 区

西区では地山上に上面が水平な整地土層を確認した。時期が明瞭な遺物は出土していないが、遺構検出面は中区より0.4m程度標高が低いことから、山田寺造営時の整地土である可能性がある。

またこの整地土層上面では、瓦を蓋とする暗渠状遺構を検出した(SX762、図179)。瓦はいずれも古代のもので、平瓦の凸面を上に向けて配置する。SX762の南端に



図179 SX762 (西区、北西から)

はピット状の遺構があり、遺構自体もそこでとぎれる。さらにSX762南端の南側で完形の磚が長軸を東西方向に向けて出土し、出土位置からみて遺構にともなって配置された可能性が考えられる。またSX762を直接山状に覆うかたちで多量の瓦を含む中世以降の遺物包含層が堆積していた。SX762については暗渠と考えられるが、第188-8次調査では埋土の掘削をおこなわず時期を決定できる遺物に恵まれなかったこともあり、詳細な時期は不明である。

3 出土遺物

瓦磚類 中区、西区では基本的に中世以降の遺物包含層からの出土であり、東区ではSD540Bの埋土上面で出土したものがある。出土点数は軒丸瓦7点、軒平瓦5点、道具瓦17点、丸瓦459点(55.33kg)、平瓦1,923点(179.58kg)にのぼる。道具瓦には垂木先瓦3点、面戸瓦1点、隅切平瓦4点、用途不明瓦9点がある。ヘラ描き瓦は11点出土。磚は2点出土した。なお、西区のSX762は現地に保存しており、当遺構に関わる瓦磚類は取り上げていないため記述には含めていない。以下では主要な瓦について記述する(図180)。

軒瓦は山田寺所用と同型式のものが出土した。軒丸瓦はいずれも山田寺式の5102型式。1は5102Cで、瓦当は厚手で側縁に格子叩き目を残す。丸瓦は楔形接合。2は5102Dで丸瓦は片柄形接合。いずれも西区出土。そのほか西区から蓮弁部分の破片が1点、重圈文を施す軒丸瓦外縁が西区で2点、中区と東区で1点ずつ出土しているが、いずれも種は不明。軒平瓦には三重弧文と四重弧文

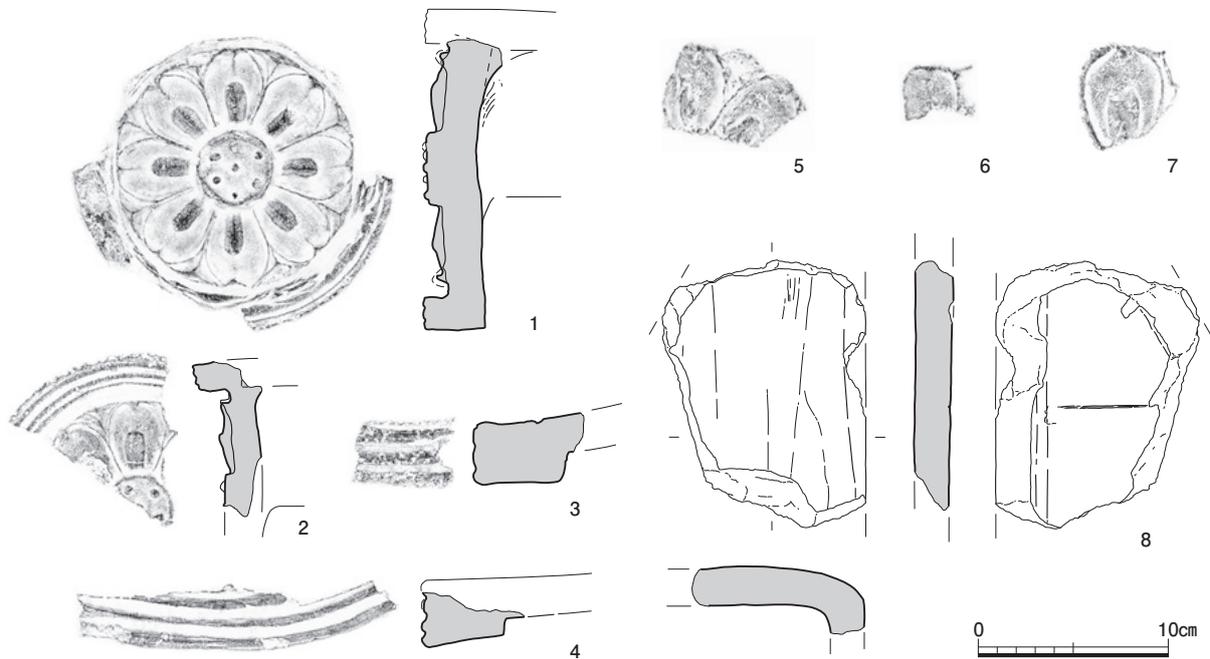


図180 第188-8次調査出土瓦 1 : 4

があり、いずれも型挽施文。三重弧文の3、四重弧文の4は西区出土。そのほか重弧文の破片が東区で1点、西区で2点出土している。平瓦は全体に、凸面に斜格子叩き目を残すものが目立つ。

また道具瓦では、まず垂木先瓦は山田寺所用と同型式で5はC型式、6はD型式で中区出土。7はE型式で東区の出土である。東区で出土した8は形態から箱形瓦の可能性が高い。しかし山田寺の箱形瓦では8のように隅切りを施すものは知られていないため、隅木蓋瓦の可能性も考えられる。そのほか面戸瓦は中区で1点、隅切平瓦は東区で1点、西区で3点それぞれ出土。磚は東区で1点、西区で2点出土した。

土器 整理用木箱で3箱分が出土した。ほとんどが中世以降の遺物包含層からの出土である。土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、白磁、近世陶磁器片などがあり、飛鳥時代から江戸時代までのものを含む。

石製品 榛原石の欠片が、中区で5点(860g)、西区で4点(4,940g)出土した。中区のものはいずれも400g以下の小片だが、西区で出土したものの中には1点3,220gにおよぶ比較的大型で板石状の破片を含んでいる。

4 まとめ

東区では石積溝SD540Bの延長部分を検出し、中区では柱穴列、西区では瓦蓋の暗渠状遺構を確認することができ、それぞれ狭小な調査区だったが重要な成果があった。とくに中区の柱穴3基は山田寺北面大垣SA570を構成すると考えられ、さらに第6次調査の成果とあわせ北面大垣が8尺等間の一本柱塀である可能性が高まった。西区で検出した整地土層およびSX762の性格と時期については、第188-11次調査の成果とあわせて言及することとする。

また出土遺物からみれば、西区からは隅切平瓦、磚、榛原石などが他の調査区よりも比較的多く出土している。西区は伽藍中軸線に近い位置であることから、大垣北面中門の存在がこれら建築資材の出土傾向の差として現れた可能性が考えられる。ただし、西区ではSX762を覆うかたちで遺物の集積がみられたため、単に廃材の片付けにともない集められた可能性もあり、今後の周辺での調査の進展に期待したい。

(山本 亮)